

三宅 隆司

みやけ たかし

立教大学大学院 現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程後期課程 映像身体学

〈機械による知覚〉という概念と共に切り拓かれた、「ひとつの巨大な方向」(『小津安二郎の家 持続と浸透』、98頁)がある。それは、19世紀に誕生したカメラという機械映像の存在が、人類史に対して新たに穿った「方向」である。『小津安二郎の家』において切り拓かれたその「方向」から派生する無数の系列を、この本は受け止めると同時に開いている。したがって、レオス・カラックスやアッバス・キアロスタミといった現代作家たちを主として取り上げつつ、この本の扱う主題は多様となる他ない。意味や記号の問題(第一章)、歴史や神話の問題(第二章)、記憶や過去、死の問題(第三章)、潜在性という哲学的問い(第四章)、実在の深さということ、そして死を乗り越えるということ(第五章)、時間の問題(第六章)。むろんこれと異なる相貌をこの本に見出すことは、全く可能である。全く可能であるし、そうした多様性たらんことが、この本の本願の一つであるだろう。つまりそれは、映像身体学に対して、間断なく無数の問いを発し続けているのだ。

それら無数の問いは、著しく本質的な思考を経て読者へと提供される。その本質性に、しばしば読者は圧倒されてしまうかもしれない。しかし、その思考のカーヴを経た先で、この本は驚くほど私たちの近くに在るだろう。たとえば、意味や記号、あるいは言葉の存在に苦しめられた経験のある人間にとって、この本には極めて切実な思考が内蔵されているかもしれない。このアクチュアリティを、我が身との近さを捉えることが肝要である。この〈身体〉の存在を抜きにして、この本の機械映像についての思考はあり得ないのであるから。

先述したように、その思考は驚異的な深部にまで向かう。このほとんど底の底のような地点から、この本が顕われさせるのは、物質というものの、言い換えるならば、この宇宙というものの限らない肯定性である。あるいは、機械映像によってもたらされる、その肯定性と人との交わる契機を、この本はさまざまな箇所を開いている、と言えるのかもしれない。そう、それは〈開かれている〉のだ。

それを受け止め、さらに押し進める、あるいは、さらに新たな道を切り拓くのは読者の役目、とりわけ映像身体学の学徒たちの役目だろう。この本の顕われさせる、その最深部にある絶対的な肯定性は、その試みに挑む人間にとって、とびきりの追い風を届けてくれるに違いない。

解題 | 前田英樹『セザンヌ画家のメチエ』

青土社、2000

前田英樹『絵画の二十世紀：マチスからジャコメッティまで』

日本放送出版協会、2004、NHKブックス

瀬崎 元嵩

せざきもとたか

立教大学大学院 現代心理学研究科映像身体学専攻博士課程前期課程 映像身体学・表現論

086

立教映像身体学研究
5

前田先生の一教え子、映像身体学の一大学院生として解題を書くことになった。解題を執筆する方々の中で最も大学生と年齢に近い私としては、先生の本を読むことの喜びと驚きがあるのまま学部学生に伝わればと思う。取りあげる本は『セザンヌ——画家のメチエ』『絵画の二十世紀——マチスからジャコメッティまで』である。この二冊にそれぞれ共通する、「写真登場以後の絵画」と「絵画記号」という軸から紹介したい。これらの軸は、〈在るもの〉の〈知覚〉を問う映像身体学にとって、深い学びの糸口にもなるものだ。

＊

『セザンヌ——画家のメチエ』『絵画の二十世紀——マチスからジャコメッティまで』は姉妹書として読める二冊である。前者は、セザンヌの一つ一つの作品に寄り添いながらその生涯と思想を克明に記した評伝である。まるでセザンヌが読者に語りかけているように読むと感じられる。後者は、セザンヌの後継者たち、マチス、ピカソ、ジャコメッティ、ルオーが感覚にもとづいて〈在るもの〉を探求し、いかに絵画をつくりだしたかを描き出す。

著者の文章は、具体的な対象をあるがままにつかみだすという意味で〈批評〉で